

第 14 回 2012 年 5 月 30 日(水)

ゲスト 成瀬 國晴 (イラストレーター)

【アナログ時代のテレビ絵史～イラストレーターが速写～】

司会 今日で 14 回目の「メディアウオッチング」です。

今回から司会役を務めさせていただきます(出野)。これまで絶妙の進行役としてこの会を牽引してこられた壺岐さんが東京に引っ越されました。その代わりが務まるかどうか分かりませんが、交通整理の役割はさせていただけるのではないかと考えております。よろしくお願いします。

先ほどからすでに話はずんでいますが、今日はイラストレーターの成瀬國晴さんをお招きしました。成瀬さんは、早い時期からテレビ番組のロゴとか、番組セットのデザインを描いたりして独特の成瀬ワールドを形作ってこられました。

(この会では)放送に近いところで、尚且つ長く放送業界を見てこられた方に一度お話を伺いたいと考えていました。これほど打って付けの方はいらっしゃらないということで成瀬さんをお願いしたところ、快くお引き受けいただきました。

今日のために、これからご覧いただく映像(イラスト)もわざわざ編集していただきました。成瀬さんの著書『アナログ時代のテレビ絵史』(たる出版、2007 年発行)に収められている作品群の一部です。今日は特に構えてタイトルを付けていませんが、この著書のタイトルがこの会のタイトルになるのかなと思っています。お手元の資料は、この本の後半にある「わたしとテレビ」からコピーしたものです。

改めてご紹介の必要はないかもしれませんが、「イラストレーター成瀬國晴」は有名です。一方、上方芸能史の生き字引のような方であり尊敬しております。この分野でもご著書があり、この「なにお難波のかやくめし～上方芸能の宝庫『日本橋三丁目物語』」では、私も上方芸能について勉強しました。

さて、放送と関わられたのは、いつごろでどんな形であったか、今放送についてどんなご意見をお持ちなのか、お話を伺いたいと思います。

成瀬國晴氏

(皆様は)私がお世話になった方々ばかりです。あまりここで大きなことは言えないのですが、町内会の出野さんからのお話でお招きいただきました。

まだ現役でしこしこやっております。この業界で 30 数年、いろいろなことをさせていただきました。皆さんもちょっと懐かしいかと思しますので、私が関わったテレビ番組の中で描いたイラストを用意してきました。この年齢でこの映像を作るのはたいへんだったんです。約 1 か月かかりました。一昨日、出野さんといっしょにこの会場に来て、プロジェクターによる映写テストも済ませました。

成瀬さんは、1936（昭和 11）年 浪速区日本橋 3 丁目、難波の旅人宿「むかでや」の 4 人兄弟の三男として生まれる。

1956 年、日本のファッション・イラストレーターの草分け長沢 節門下の明石マサ(本名 明石正義)さんに師事。

浪速的だが、都会的な洗練された感覚を身に付ける。

<新聞社募集の 4 コマ漫画に応募、初入選で賞金 1000 円>

私は 33 歳からテレビの仕事始める。もう 44 年経つ。その間 32~33 年は放送業界でお世話になった。おかげさまで家も建った。孫子も元気に育っている。何と言ってもありがたいことだと思っている。

私はもともと絵を描くのは嫌いで、小学校でも(美術の)点数は悪かった。小学校の絵の成績はだいたい 40 点平均であった。まさか絵を描いて仕事にすることとは考えてもみなかった。

昭和 22~23 年に手塚治虫さんがデビューし、「新寶島」を酒井七馬さん(原作・構成)といっしょに制作した(作画 手塚治虫)。この手塚さんに魅せられて、中学校から一生懸命(手塚さんの絵を)真似するようになった。授業中に手塚作品をまねしながら絵を描いていて見つかり、先生に叱られたこともあった。だから、お孫さんが落書きしていても温かく見守り、決して止めさせたり、「空は青でないとかかん」と言ったりしない。それは将来どういう形で実を結ぶかも知れないからだ。

手塚さんに影響されて高校 2 年のとき、大阪読売新聞が募集していた 4 コマ漫画「アンデパンダン」(選者 南部正太郎)に応募、初入選した。賞金 1000 円(税引き 900 円)をもらった。うどんがまだ 40~50 円の時代だったので少々の小遣いができたわけで、これが病みつきになってあちこちに投稿して小遣いを稼いだ。

それで本気になって絵を描き始めたのは二十歳。東京に長沢 節というファッション・イラストレーターの大御所がいて、その人に師事し本格的に勉強を始めた。雑誌「それいゆ」の表紙などを飾っていた中原淳一さんのファッション画が有名だった。これからの時代はファッションの絵だと友達からも勧められ、ファッション画を教えてくれるところを探した。その当時、ファッション画は洋裁学校で教えていたが、男子禁制でどこへ行っても断られた。たまたま心齋橋を歩いているときに、長沢 節の教えを受けた明石マサ(1928~)さんが東京から帰ってきて教室を開いたと聞き、早速、ファッション画を習い始めることになる。

しばらくして、玉造のアトリエに呼ばれ、内弟子のようなことをせよということで弟子入りする。そしてたたき上げられた。

(スクリーンに映し出された野球帽の女性の人物画や雑誌などを切り抜いて画面を構成したコラージュの作品を示しながら)

このシュールな絵も明石先生のアトリエで学んだものだ。  
一応、シュールなタッチの作品も制作し、本業のファッション画に入っていた。  
この世界は描かないと上達しない。ということで人物を描くのに、人が10枚描けば、私は50枚描いた。ハングリーだったから、人には負けないように努力した。  
その結果、シュールなものも含めて一応ファッション画の技法を習得した。  
不思議なことに絵を描くのが嫌いだと言っていた私が、偶然にもここまで描けるようになった。  
イラストレーターとして時代に乗り遅れないため、ポップアート（Pop Art、アメリカを中心に広がった現代美術）も手掛けるようになった。星条旗の星だとか、ミッキーマウス、コカコーラなどアメリカ的なものを題材に表現していく。こういった絵画はコマーシャルの世界にも影響を与えていった。  
アンディ・ウォーホル(1928～1987)や横尾忠則(1936～)の世界である。  
純粋絵画の人と違って、イラストレーターとしてはその時代の要求に応じて絵を提供していくことが求められた。テレビ局が視聴者を意識して番組を作るのと同じ考え方で制作していた。

<見立て「写楽」テレビの人気者を浮世絵に>

そして1979年、自分が個展を開く段階までたどり着いた。さて何をしようかということになって思い付いたのが、東洲斎写楽（江戸後期の浮世絵師）の似顔絵表現を利かした手法を、現代に置き換えて描いてみるということだった。当時の浮世絵師は市井の中で役者絵を描いていた。アカデミックなものでなく、今で言うブロマイドに当たるものであった。「写楽」模擬を試みようと考えた。つまり広重、北斎も同じ時代であるから、僕は、僕の時代の中にある役者、即ち庶民の人気者テレビタレントを、強烈な表現が特色の写楽の見立ての技法で描いてみることにした。そこで当時人気番組だった「11PM」（読売テレビ、日本テレビ）の司会をしていた作家藤本義一さんという人物を東洲斎写楽に見立てて、似顔絵を描いてみた。写楽に入れ替わって見事に藤本義一が浮世絵に収まった。  
作品を制作するに当たり、我々が先祖から受け継いでいる千代紙、筆、墨、あるいは端切れを意識的に使ってテレビの人気者の似顔絵を表現していった。

（一連の作品「見立て写楽 東西名物男」は代表作となる）。

特にこのテレビタレントの(見立て)絵が東京では大いに当たった。やっぱり上方から上がってきたもので、遊び心と大阪で言う粋というのが効いていたと評判になった。

個展は大阪でも開催し、各テレビ局からも声がかかり、似顔絵の成瀬という形が定着する(成瀬さんのイラストが頻繁にテレビに登場してくる)。

成瀬さんの話は、ここから各テレビ局で制作した作品の紹介に移る。NHK、毎日放送、朝日放送、関西テレビ、読売テレビ、テレビ大阪、KBS 京都、サンテレビなど「アナログ時代のテレビ絵史」に収められている 1135 点（1969～2006 年）の中から選び出された 100 数十点が豊富なエピソードを交えながら紹介されていく。

イラストレーター成瀬國晴の、37 年間に及ぶテレビとの関わりがスクリーンに映し出される。生放送中のスタジオで、秒単位の締め切り時間に追われながら、一枚一枚手書きで描き上げていったイラストも多いという。

<NHK 桂 三枝の名作「ゴルフ 夜明け前」もイラストに>

NHK は 22 番組 136 点。忘れていたものもあるが、この位の数で NHK の仕事をやらせてもらった。その中には、桂 三枝の有名な創作落語「ゴルフ 夜明け前」も題材にした。時代は幕末、坂本龍馬が近藤 勇と沖田総司を招き、ゴルフに興ずるといふ筋書きの上方落語で芸術祭賞を受賞した作品のイラスト画である。このほか、「夫婦善哉」では見立て絵でなく、新歌舞伎座へ行ってスケッチした絵もある。若いときにファッション画などで勉強したことが役立った。僕は不思議に間口が広くてどんな絵でも描けた。旅番組にも出演し、実際に現地に行ってスケッチし、作品を郵便ポストに入れて郵送し、絵手紙のスタイルで放送したこともある。

<毎日放送 実験番組「自遊空間えつくす」に生主演>

毎日放送は意外と依頼が少なかった。展覧会を開くに当たり調べてみると、毎日放送の番組を扱った絵がなかった。そこで知り合いのプロデューサーに電話して「各局が揃っているが、毎日放送は一点もない」と言ったら、すぐに依頼があった。それが「いい朝 8 時 八木治郎ショー」であった。昭和 45 年の話である。この朝のニュース・情報系番組には私もリポーターとして出演することになる。また「おめでとう日本列島」（昭和 58 年）では、権力と財力を持つ秀吉が今生きていて大阪城を造ったらどんなものになるか、想像して考えてほしいという注文があった。そこでコンピューターの権威 大阪大学の 大村皓一 教授にお願いして、僕のイメージをコンピューターで立体化してもらった。展望台は千生り瓢箪、金箔の台座を造って、ヘリコプターで中を回るように動く仕掛けにした。まだテレビにコンピューターグラフィックスによる動画が登場するのが珍しい時代であった。

3 か月で終わることになる実験番組「自遊空間えつくす」（土曜日深夜）という番組にも生出演した。この番組は「テレビ」で「ラジオ」をやろうという発想であっ

た。鶴瓶と清水国明（鶴瓶の大学時代の先輩）の二人が主役になって楽屋の部屋(テレビ画面には映らない)で好きなことをしゃべる。そして雑談している横で同席している僕がその話の面白いところを板(多分電子黒板か)に描いて、即テレビ画面に登場させるという映像と音声は全く無関係な番組だった。例えば画面には女性が出てきてただただ化粧をするだけで、その画面の音声はと言えば、何を食べてきたなど関係のない雑談ばかり。一回目の放送では“音がずれている”などと苦情の電話が殺到した。30年近く前の話であるが、現代に通じるものだと思っている。この番組は思い出に残る番組の一つだが、このときの絵をよく保存していたなど思っている(薄っぺらなコピーペーパーのようなものに描いていた)。

テレビ局などで描いたイラストの保存について、成瀬さんは『アナログ時代のテレビ絵史』の冒頭、こんな風に記している。「テレビに絵を描きはじめてころ、番組が終了すると絵たちは半分に折られゴミ箱に放り込まれたり、風よけのため机の脚に貼られたりもしていた。

これでは彼らが可哀そうだと返却をお願いして、将来のために保存しだした。

ある程度たまった1980年『絵供養・10秒のために描いた絵』展を開いた。

テレビ画面に寸時しか映らないものをゆっくり観てもらおうという視聴者サービスのものでもあったが、心をこめて描いた絵たちへの感謝でもあった」。

<朝日放送 桂 枝雀の似顔絵には苦労した>

ここで紹介する番組以外にも、関わった番組はたくさんあるが、時間の関係で割愛する。朝日放送は24番組、224点。朝日放送の番組がTBSに流れていた時代の番組「モーニングジャンボ」(昭和46年)ではゲストがスタジオに入ってきて、その場で速写してほしいという指示だったので、すごくきつい仕事であった。ごらんのクロッキー(速写画)でも5分、3分、1分、20秒ぐらいまでは修練していたので難なく描けた。短時間で写生するのに慣れていた。しかし知名度のある方がゲストに迎え入れる番組で、(私は)座って描くのだが、対象の人物まで距離があるので写生は難しく、とにかく一生懸命、集中して描き続けた。

「米朝ファミリー 和朗亭」(司会 桂 米朝、安藤孝子)では、番組の景品にカルタを作ることになり、当時の人気タレント西条凡児や上岡竜太郎などの似顔絵を花札の中に入れ込む図案で12か月ぶんを揃えた(任天堂制作)。そのカルタは僕のところに今一組しか残っていない。

そのカルタがこの間、「なんでも鑑定団」で紹介されていて、1万円の値がついていた。(セットの値段としては) ずいぶん安いなと思った。

(各局の番組をイラストで紹介しながら、スタジオの片すみから見た成瀬流のタレント寸描がリアル)

「ちりちりの髪を丸く盛り上げたトレードマークの長髪(アフロヘアの) 鶴瓶のこの絵を見て、よく聞かれたが、あれは地毛であった。出演の前には、必ず風呂に入って、シャンプーして、髪を丁寧に整えていた」。

(話は「枝雀寄席」でのエピソードに移る)

桂 枝雀の人気は今も衰えていない。昨年のことだったが、映像でつづる「枝雀寄席」がサンケイブリーゼで開かれたところ、3日間満席であったという。映像だけで人を集められる新しい形の落語会となった。

ところで、枝雀さんの似顔絵を描くのにはずいぶん苦勞した。一度こんなことがあった。

(描くのに行き詰まり)最終的に鉛筆を投げ捨て、腹が立って旅に出たことがある。旅行中は、一日中落語を聞いていた。そして帰ってきたら、2分で描けたことがあった。というのは、(似顔絵を描くとき)頭の奥行きといっぺん凹むということがある。それから、額のV(ヴィ)を見つけて、描けるようになった。V(ヴィ)が基準になって、V(ヴィ)から頭の額の幅が決まった。前からいくと距離が分からなくなる。(苦勞したが)枝雀さんは、自分の中では得手の人になった。

<関西テレビ 「ノックは無用！」ではスタジオセットに挑戦>

関西テレビは32番組、366点と恐らく関わった番組が一番多いのではないか。先ほど申し上げたように、東京で個展を開き、大阪に帰ってきて最初に電話がかかってきたのが、関西テレビの村上正次さん、もう亡くなりましたが、「凡児のお手並拝見」で司会の凡児さんと審査員の方々を写楽の浮世絵風に描いてほしいという依頼であった。これは昭和49年の番組で、同じ40年代では「ハイ土曜日です」(昭和41年)、「パンチDEデート」(昭和48年)など報道番組から娯楽番組まで幅広く関わった。

長寿番組「ノックは無用！」(昭和50年～平成9年)ではスタジオセットの一部を私が描いた。アナログ時代なので、これはたいへんな作業となった。スタジオの天井まで届きそうな大きなセット(横6尺、縦9尺)にゲストの人物を描くのだが、そのためにまず自分の仕事場で下絵を描く。もちろんこの段階では白黒である、そしてこれをTV局が写真で拡大したものに、色を塗って完成させていくという手順であった。何しろ大きなセットなのでスタジオでは脚立に上って描いた。細い筆では描けない、といってポスターカラーでは線が消える、

そこでフェルトペンの幅広いもの見つけて、色を塗り仕上げていった。まだカラーの時代でもなく、当時としてはこういった作業の方法は普通であった。色つき写真を撮って、それを拡大して伸ばす手法もあったが、当時はまだ費用がかかりすぎるといことで、安上がりの手描きでのセット作りが続いた。

(絵の対象になる)出演者は最初一人ずつだったが、だんだん増えて、人数の多いドリフターズ(6人)が登場するときもあった。作業量は何倍にも増えた。しかし(私の)ギャラは一人出演のときと変わらなかった。

1990年代に入って制作した「ノックは無用 '99年大変身スペシャル」では、すでにカラーの時代に入っていて、カラーで描いた絵を写真に複写し拡大していく手法がとられた。カラー写真を大きく拡大しても採算の合う時代になっていた。スタジオで脚立に乗りながら色を塗っていくという(原始的な)方法をとる必要はなく、(テレビ局の舞台美術の仕事にも)時代は大きく変化していった。

<読売テレビ 私のテレビの仕事 「11PM」がスタート>

私がテレビの仕事に関わったのは、「11PM」が最初である。読売テレビは22番組、169点の作品を残している。(写真を見ながら)私がデビューしたのは33歳、(左か右下に)だんだん年齢を重ねていることがお分かりいただけるだろう。とにかく「11PM」という番組は長く続いた番組だった。今はこの種の番組はない。いわゆる裏文化というものを表に出してきた大人の番組であった。しかしPTAから俗悪番組だと批判された。例えば宴会で春歌をうたう文化は宴会がなくなって消えてしまう。築いてきた裏文化が消えていく、お座敷遊びなどもそうだがさびしいなと思う。それは何かの形であったということを残さないといけないと思っている。その意味で「11PM」という番組はそういうものを表に出してきたすごいものがあったと思う。「11PM」も大阪制作(藤本義一、安藤孝子)と東京制作(大橋巨泉ほか)では切り口が違っていた。

この番組では視聴者を楽しませるためにいろいろ見せる工夫をした。画面に表示されている文字や図を指し示すのに、鉛筆や指し棒などを使って説明していたが、面白くないので、指先カバーのような小道具を作って視聴者を引きつける工夫をした。手作りだが画面から温かさが伝わってきたと好評だった。またCGが自由に使える時代ではなかったので、カメラ3台を使ってサブスタジオでのスイッチング操作で、動画のように見せようと試みた。何枚も絵を描き、カメラ操作で手作りの動画にして人物を動かし、画面を立体的に見せる工夫をしたのである。さらに人物についても胴と首を動かしたりして、アナログはアナログなりに、面白さを追求していた時代である。全部生放送中での“工夫(演出)”であった。

<法廷スケッチがヒント 相撲の支度部屋など取材対象広がる>

裁判が開かれている法廷内での写真撮影が禁じられているため、被告の表情などはメモ（スケッチによる速写）でしか記録できないことになっている。そこで被告の表情は似顔絵などで表す手法を各報道機関が採り入れた。

この「法廷スケッチ」は私にとっても重要な仕事の一つになった。三和銀行事件(1981年)、イトマン事件(1999年)など、法廷内の表情をスケッチした。ファッション画を勉強していたとき、クロッキーを一日 50 枚描き続け、短時間で描くという修練が出来ていたので、スケッチ描写（被告の表情など記録）はなんなく出来た。ただ自分が座っている位置からは被告席の正面が見えず、せめて顔(被告)の半分でも見えるところにもう一席取ってもらえるよう、記者にお願いして別の角度からの表情をスケッチした。色づけは法廷の外に出てから行うのだが、それにしても締め切り時間に追われる仕事であった。

これだけ情報が溢れている時代に、情報を外に出せない場所があるということ、この法廷取材で知ることになる。法廷の中のように(カメラの)制限の厳しいところがないか調べたところ、例えば、相撲の支度部屋とか、タイガースのベンチの中、選手の食堂、それから上方落語なども人々の関心を呼ぶ取材（スケッチ）対象になり得ると考え、仕事の領域を広げていった。

若いとき苦勞して、ファッションの世界でクロッキーをやっていたことが非常に役立ったと思っている。

「テレビ大阪」では 12 番組、54 点。中でも「天神祭りの中継番組」は夕暮れから船に同乗して生放送中に何枚もスケッチし、その都度オンエアされた。平成元年から 17 年間も続けた思い出に残る仕事であった。

「KBS 京都」は 6 番組、23 点。基金集めのチャリティー番組「カタツムリ大作戦」にも関わった。このほか「サンテレビ」「奈良テレビ」などラジオ、テレビを含めて、関西のほとんどの放送局で仕事が出来た。今紹介した作品を中心に編集した『アナログ時代のテレビ絵史』の出版に当たり、肖像権、著作権などの問題があったが、各局ともよく協力していただき感謝している。

（イラストでたどる成瀬さんの懐かしい“テレビ史”はひとまず終わり、ここから質疑に入る予定であったが、成瀬さんは突然、人形のようなものを持ち出し、

「こういうものをご覧になったことがありますか？ 手にもってなでてみてください。何だと思いませんか。情報通の皆さんだからご存知だと思うのですが」と出席者に問いかけた。手にもてるサイズの、目も鼻も口もない、そして手足はあるが指はない、白っぽい人形のようなものに触れながら、  
「低反発の素材に似て弾力感がある。健康法に使う道具みたい。なんとなくエロチック。はじめて見た。摩訶不思議なもの」



などその感触を思い思いに述べるが、どうやら正解はなかったようだ)。

成瀬氏 これは次世代の携帯電話である。「エルフォイド」、「エルフ（妖精）」のようなものということでこの名が付けられているが、携帯型遠隔操作アンドロイド（人間の形につくられたロボット、今年 3 月に発表）である。大阪大学の石黒 浩先生が制作したもので、胸などにある四つのボタンのようなものを使って操作する。映像装置としても利用できる。話すとき、従来型の携帯電話のように耳に当てるのではなく、正面に向かってマイクでしゃべるように会話ができる。人間の形をしたモデルだと、遠隔地の人との会話でも体感的に話ができるような気がする。（見たところこの人形は）大人でもない、子供でもない、男でもなく女でもない。「エルフォイド」はすでに公開され、時代はここまで来ているということを伝えたかった。

ということでテレビの話になるが、私は今持っている iPad(アップル開発)を含めてパソコン 7 台を持っている。メールをいただいても 7 台に入ってくるので全部消していかなければならない。煩わしいこともあるが、現実にはそういう時代に入ってきているということだ。この iPad には、書籍が本棚に並んでいるように表示されている。好きな書籍を画面で読むことができるようになっている。テレビのことを考えたとき、今の送り出しでいいのかということになる。テレビを取り巻く環境が激変し、テレビの送り出す側も、受ける側も変わらざるを得ない状況になってきた。若い人は今テレビを見ない、本を読まない、車も持たない。そして彼らは iPad に熱中しているのである。また国会のニュースなどもネットの「ニコニコ生放送」で見ている人が多い。「ニコニコ生放送」は中身を編集したり、短くまとめたりせず、すべて生放送で細工せず流している。国会中継や政治家の記者会見が生で見られるので話題になっている。（「ニコニコ生放送」は 2007 年 12 月 25 日設立。「ニコニコ動画」の追加されたサービスの一つ）。映像をユーザーの選択によって見ることが出来るオンデマンド方式も登場し、映像の見方、情報との接し方が一変した。

僕の人生の中でテレビとの出会いは昭和 23 (1948)年。大阪天王寺区の上本町で開かれた復興博覧会の会場であった。そのときテレビジョンが展示され、会場では丁度「大阪万博」(1970 年)で「月の石」の前に行列が出来たように、テレビジョンの前に長い人の列が出来た。僕もその行列の中にいた。

僕らは集団疎開に行って帰って来て戦後が始まるわけだが、そのとき我々がめざしていた幸せというものをもう“通り越した”ように思う。

かんてき(七輪)でお湯を沸かすのに 1 時間かかった時代である。今“チン”で瞬間的にお湯が沸く。(電子レンジは)魔法の箱だと思う。七輪の時代を経て、オリンピックを開催し、万博を成功させる。あの頃の新聞は輝ける未来ばかり伝え

ていた。それからバブル。バブル景気を味わったから、まだ先にバブルのようなものが来るのかなと夢を持っている人がいる感じがする。

しかし現実はそのな（うわついた）時代を求めている。例えば映画でも最近、無声映画（「アーティスト」）がアカデミー賞で作品賞など五冠を獲得する。「アーティスト」はフランス映画史上初の白黒サイレント映画。無声時代にスターだった役者がトーキーになって落ちぶれていくハリウッドの変遷と人間の営みを描いた作品である。そういうものが今要求されている。山崎 貴監督の「ALWAYS 三丁目の夕日」（2005年製作）も同じような背景がある。この映画は昭和38年、東京の下町が舞台。テレビを見たくても、テレビが買えない時代で、それでもご近所さんが助け合って幸せになろうと一生懸命に生きていた時代である。

（この映画で描かれた人間関係が）きっとこれからの時代だと思う。いっぺんそこに戻ったらいいと思う。

2011年(昨年)3月11日の東日本で起きた大震災と原発事故で、人々は目が覚めたのではないか。こんなことではアカン。我々の生き方はこれでよかったのか。いろいろな分野でそういったことを感じるようになってきた。だから「輝ける未来」はもういい。「懐かしき未来」であつたらいいと思う。いつまでも上ばかり見てはアカンのではないかとみんな思っている。

そんな中でこんなもの（エルフォイド、iPad）が現われてきた。あの箱（型の携帯電話）ではアカン。

出席者 僕自身 iPad は持っていない。実際に持っておられて、生活の質が高まったとか、夢に近づいたとか感じるか。

成瀬氏 感じない。

出席者 僕はまったく必要ない。

成瀬氏 だから情報が必要ない年齢になってきた。

出席者 生きている限り、情報が必要でないということはない。

成瀬氏 どこかでこれまで情報を扱う仕事をしてきたのでもういいわということがあるのではないか。

出席者 確かにそれはある。

成瀬氏 それでも何か伝えたいということはないか。

出席者 それはある。ちょっと極端なことを言うと、箱(型の携帯電話)じゃアカンというのはその通りだが、もっと言えば電話も要らなかったかもしれない。人類にとっては、それは人と顔を合わせて話すほうがいいのに決まっている。遠い人でも手紙を出したほうがコミュニケーションは深まる。

成瀬氏 人類はどこで間違ったのか。僕は絵にも描いたが、火を使ったことが人類の間違いだったと思う。猿と変わっていくのは、人類が火を使い始めてからである。

出席者 人類に火を与えたプロメテウスの話（ギリシャ神話）にある。

成瀬氏 我々高齢者にはもういいかと思うのだが、まだ先を追いかけるか。若い人は意外にもさめている感じがあった。

出席者 さめているのか、車に興味を示さず、新聞を読まない、ゴルフをしない。マージャンもしない。

出席者 若い人も楽しみを求めていることは確か。

成瀬氏 ここに（iPad）に行く。そしてゲームとか。

出席者 もっと言うと、結婚しない。年頃になって、草食男子だとか、もっと人間というのは自然に発情するものだが。（めんどくさいんじゃないか）

成瀬氏 子供を生んで育てて行って幸せになるかと考えたとき、ちょっと躊躇するのではないか。

出席者 それはそうだろう。つまりどんな未来があるかということが見えないから。子供に不幸を味わわせるだけじゃないかという思いがあるんだろう。

成瀬氏 万博以前に我々が持っていた輝ける未来はもうない。

出席者 子供はみんな我々の時代を見ているからね。だから結婚もしない。子供もつくらない。

出席者 若者が iPad に集中しているというが、iPad で新聞を読むと著作権に触れないか。

成瀬氏 600 円払えば、iPad でも新聞が読める時代になっている。

出席者 テレビの場合、デジタル化して、例えばパソコンでハードディスクに録画することは出来るが、その録画したものを DVD にさらにプリントして別のプレーヤーで再生しようとしても、まずプリント出来ないようにロックされている。

成瀬氏 家の中で見るのは、OK ではないか。

出席者 プリントは出来ないし、もちろん再生も出来ない。これは日本だけのコピー制御の仕掛けで CPRM (Content Protection Recordable Media) という。

成瀬氏 本番の放送とは別に、各局が共同してソフトを別のチャンネルに有料で流すというようなことが近い将来実現するかもしれない。

出席者 テレビも早ければ今年の秋ぐらいに、「ウインドウズ 8」というのが発売されれば、タッチパネル式の画面でテレビを見ることが出来るようになる。

成瀬氏 テレビのメーカーも、デジタルテレビのあとは新しい仕掛けのあるテレビを企画し売り込もうとしている。

出席者 デジタルで記録された映像を一回だけの録画ではなく、二度目も別の DVD などにプリントできないか研究している。取り寄せた資料の中にはハードディスクに録画したものを、DVD に転写できる方法を示したものもあるが、トライするも今のところ成功していない。

司会 ハード面はいろいろ進化しているが、ただソフトというものを考えたとき、今の時代と何が違うのか。

成瀬氏 現在はテレビの関係者とお付き合いしていないので分からないが、少なくとも僕がテレビに出演したり、番組用に絵を描いたりしていた頃のスタッフはみな職人であった。ディレクターが構成し台本を書いた。あまり言いたくないが、視聴率に振り回されるとか、多チャンネルになっていい番組が出てきて、テレ

ビがよく見られるようになったかと言えば、逆に地上波テレビそのものもあまり見られなくなってきた。視聴率のために番組を作ることがあると聞く。しかしあれは視聴実態を表す数字でないということもよく知られている話で、現にビデオで録画し番組を見ている視聴率には反映されないという。

あえて僕が今言うこともないが、やっぱり制作者（ディレクター、プロデューサー）がサラリーマン化してきたことは確かだろう。

出席者 新しいものを作っていくという気概みたいものが昔に比べるとずっと減ってしまった。

成瀬氏 日本人の体質の中には、ある局がやっているから我々もこれはやっておいたほうが無難だということで、すべてにおいて横並びにする風潮がある。そして各テレビ局には同じような傾向の番組が並ぶことになる。そこにはオリジナリティーというものがなくなってきた。

織田作之助は、坂田三吉が名人戦で“端歩を突いた”ということがオリジナリティーだと言ってほめている。あんなものニ手損やというのにあえて端歩を突いたことを偉大であるという言い方をする(後手番 初手に“端歩を突く”奇策)。

出席者 一番テレビが変わってきたのは、テレビという媒体が広告媒体でなくなってきたことである。スポンサーが他の媒体へどんどん移っていく傾向が出てきたことにある。これがテレビ衰退の一番の要因ではないか。

成瀬氏 スポンサーがなぜ他の媒体に移っていくのか。テレビが以前ほど見られなくなってきたためか。

出席者 「ちびっこ のど自慢」という番組を制作していたとき、スポンサーが日清食品であった。創業者の安藤百福さんがこんなことを言っていた。「テレビに日清の『出前一丁』のCMを連続して放送しておかないと売れなくなる。テレビにCMを出しているということで市場が成り立っている」。今はテレビにそんなCMを出さなくても、別の媒体で宣伝すればいい時代になった。テレビはCMを伝達する媒体から離れていったというか、見捨てられたとも言える。

成瀬氏 その分、こういったiPadなどかなりの量のCMが移行していく傾向にある。

出席者 もっとマニアックな人たちはテレビのCMなど見なくなっている。

成瀬氏 世相を反映するのがテレビ。“こんな住宅に入ったら幸せですよ”といつまでも同じCMを出しているが、何かこの時代に合わず、違和感がある。

出席者 それにもう一つ言えるのは、テレビの伝える姿勢を見ていると大衆をミスリードしている場合が多い。

成瀬氏 久米 宏の「ニュースステーション」が始まってから、テレビのニュースの伝え方が変わっていく。女の人や子供に噛んで含めるように分かりやすく伝える流れが出来た。(ニュース番組だが)キャスターの衣装もアルマーニを着て、ファッションブルに見せていこうという変化が出てきた。僕もラジオをやらせてもらっていて、送り手として分かりやすく伝えることが非常に大事だということが分かった。

出席者 ニュースを面白く見せるということは大事。その一例として「ニュースステーション」を挙げたい。「ニュースステーション」が始まったとき(1985年)、東京のキャスターは久米 宏、大阪は日下部さんが担当していた。テレビの番組というのはしょっぱな、出だしでつまずいたら、番組の継続は難しい。「ニュースステーション」も視聴率ははじめ一桁で低迷していたが、アメリカのスペースシャトル「チャレンジャー」の打ち上げ失敗(7人死亡)やフィリピンの政変でマルコス大統領国外脱出など大ニュースが相次ぎ、視聴率も上昇に転じる。さらにしばらくして大阪の高槻で大化改新の立役者 藤原鎌足の墓から大織冠(大織冠らしい宝冠に使われていた金糸が大量に見つかる)が出てきた。あれはものすごいニュースである。他の媒体(テレビ局、新聞)はその出来事を面白く思わなかった。ところが久米宏の「ニュースステーション」が大織冠を映像(棺の中)の金糸などで映し出すなどこのニュースを深く掘り下げた。藤原鎌足は奈良桜井の談山神社に祀られているかと思ったら、高槻の阿武山古墳のほうに墓があって、しかもかぶっていた宝冠が出てきたというのはすごいニュースである。この鎌足のニュースは他の系列は短いニュースで簡単に扱っただけだった。しかし「ニュースステーション」は詳細に報じ、大ヒットとなった(実はこのニュースは朝日放送の特ダネであった。ANN特番では棺の中の金糸から鎌足であると断定、復元した大織冠はテレビで映し出された)それで先ほどのアルマーニの話もあるが、ニュースを面白くするというのは、根本的には大事なことから、それが視聴者の琴線に触れ多くの視聴者の心をとらえた。それがなかったら続かなかつたし、成功していなかったと思う。そのとき日下部さんが「ニュースステーションに」関わっていたのでお尋ねした。

出席者 お褒めいただきありがとうございます。  
私はそのことについてはある意味でのポピュリズム、これが逆に世の中を間違わせていると言える。そこのところのハンドリング操作というのが必要である。今はポピュリズム(大衆迎合主義)イコールベストという風潮がある。〇〇市長なんか、その(悪い)例である。

出席者 ポピュリズムをこれだけ蔓延させた、ポピュリズムこそ正義みたいな感じにさせたのは誰の罪か。伝えた側にも責任があるのではないか。

出席者 それは(ポピュリズムに乗っかると)儲かるというもとがあるからだと思う。しかし儲かるということは今やぐらついてきている、そのこと自体がね。そこのところで価値の評価はまた変わりつつあるが、それでは何を信じたらいいかといえ、私は今のところは答えが出ない。なぜかというと、非常に否定的な結論をいきなり言うようで申し訳ないが、私は人類の歴史というのはあと 50 年持つか、という感じがしてしようがない。50 年というのは、我々の周辺を見ていたら、3 年前のことがまるで変わっている。例えば IT 製品にしても同じ、3 年前のものは古くなって役に立たないというか、全部買い換えないといけない状態になっている。だからそういう周期で、3 年周期ぐらいでガラガラ全部変わっていつているということを考えると、私は 50 年先というのはどんな世の中になっているか全然読めない。想像がつかないと思う。私の否定的な結論というのは、そこでテロリズムなんだ。テロリズムだけは世界的にますます力を得ているというか、派手になっている。これも 10 年前と全然違う様相を見せてきた。昔あったデモ、デモをやるといったそんなものじゃない。テロリズムというのは姿も見えないところでテロが起きている。例えばテロリストたちが原爆を持つだろうと思っている。原爆を持ち出したら、一発で世の中が変わる。地球は滅びる。今国連で原爆を持ったらどうのこうのとやっているが、あるいは北朝鮮で査察をすとか、させないとか言っているが、今や原爆は大学生の知識があれば操作できるくらい簡単になっている。だからそういうところに原爆を持たせたらどうなるか。自分のちょっとしたことで気に入らないから原爆をとということになると、非常に悲しいけれど地球は滅びるね。  
というようなことで私は今息子や孫たちを見て、この子らが大きくなる頃に地球があるのかな、ほんとうにそんなことを思っている。

出席者 核の抑止力でバランスがとれていた世界もガラガラポンで崩れ始まるか。

- 出席者 テロリズムをジャーナリズムが抑えられるか。
- 出席者 それは非常に難しい。誰かの意見を聞くとか彼らには主義主張があるわけがない。
- 出席者 全く悲観的な論はよく分かるのだが、もうちょっと希望的な、まだ希望をもたないと。
- 出席者 私がこんなことを言ったが、私の望むところではない。
- 出席者 テレビの問題から話が始まったが、結局そうなっていくんだな。考えていけば。そういう問題を考えざるを得なくなってくる。構造の問題、人間の劣化というか、両方の原因からテレビもこうなっているし、世界もこうなっている。だから「終り」はそうなってくる。
- 成瀬氏 ここにご出席の方々にはテレビ(放送)が誕生したときから、現場を見続けてこられた方が多いので、テレビのことを一番よく知り理解している方だと思う。
- 司会 今ポピュリズムという話が出たが、それを作り出したのはテレビかなと思う。というのはある種、幼児化に繋がる話ではないか。  
「11PM」の話題が出たときに、テレビは大人の文化だというご意見があった。ところが今、テレビというのは大人が見るに耐えうるものがあるのだろうか。
- 成瀬氏 これから高齢化がどんどん進んでいく。「AKB48」なんか見ていると、幼稚園の学芸会を見せられているようでなじまない。我々は NHK の旅ものとか、民放 BS のしっかり作っている番組に興味を惹かれる。年寄り向きにもっと魅力的な番組を作ってほしい。  
(制作者も)視聴率のために番組を作っているということを分かっているやっているといると思うのだが、それをどこで断ち切るか、断ち切れるか。(制作者の)サラリーマン化の中で、そうすることが日々安泰なんだろうと思うが、(これを打破できるかどうか)メディアの大きな責任だと思う。
- 出席者 テレビ全体トータルとして見ると、本当に絶望的なんだが、やっぱりごく少数ではあるが、とてもいい番組が存在していると思う。それをどうやって見つけ、どうやって応援していくか、それが一番大事なのではないかと感じている。



出席者 いい番組がいくつもあるが、残念ながらそれがどのくらいの視聴者に見られているか。（見られていない）

成瀬氏 だから消えていくのか。それは視聴者の問題でもあり、国民の問題でもある。

出席者 たいへん高度な話になってしまったので、口を切りにくかったが、私の友達に京都大学の原子力を専門としている先生がいる。この先生から言われた。「民放なんとかせえよ。程度が悪すぎて見るものが全然ない」と。私は「民放もいろいろ事情があって」という話をしたら、その先生は最近の学生についてこんなことを言っていた。「熊取(京大原子炉実験所)に来る学生が“疑問を出さない”。京大の学生はへりくつを言うと言って買われて(評価)いたが、京大の学生ですら文句を言わない時代になってしまった。非常に東大型になっている」とその先生は言っていた。

「もっと文句を言うような学生を育てるようにならんのか」とも言われた。これは私らの義務と違いますと言ったら、今話題に出ていたポピュリズムで、バカな番組ばかり作っているから、若い人は電車に乗れば、すぐさま携帯電話を取り出し、操作し始める。ああいうことにどうしてなってしまったのか、民放全体で反省の声を上げんといかんのと違うかと思って、それを「メディアウオチング」の場で言おうと今日ここに来た。

出席者 民放だけじゃなくて、メディア全体に言える。

出席者 NHK ですら、民放に同調していると先生は言っていた。

出席者 僕はその先生と年齢的に同じ。僕らの学生の頃は、共産主義はイデオロギー的にロシアの衰退でつぶれた。最近になって資本主義も終わったか、そういう時代に入ったのかなと思う。金融工学が成り立たなくなって、世界中がおかしくなってきた。イデオロギー自体変わらざるを得ない。それにメディアがついていない。

それにもう一つ、僕らがラジオをやり、テレビをやっていた頃は一方通行であった。今はマクルーハン(カナダ出身、英文学者、1911～1980)の言った通り、もう「地球村(グローバルヴィレッジ)」になってしまった。どこからでも、誰でもが、ものを見たり、聞いたり出来るので頭の中だけは知識がいっぱい入っている。それに見るものもある。

その中におけるテレビというもの、その存在価値は一から考え直さないと、おっしやるようにあと数年しか持たないかもしれない。僕はこの会議で以前、「民

放は免許を返上せよ」といったことがある。それくらいの発想でないと、いわゆる従来型の免許でそれから自分たちが王様であるということで中身（番組）を作っている限りは立ち直れないだろうと思う。

しかしそれは歴史が帰結したわけで、何が悪いわけでもないのだが、それに気付くかどうかにある。

出席者 今の大学生の気質が変わったという話があったが、それと同時に我々の後輩たちというか、民放にしてもそこで働いている人たちにそういう(危機)意識があるか、はっきり言うと私はそれを一番危惧している。

出席者 もう一つ言わせていただきたい。私は 5 年前に大阪から京都に引っ越した。今京都からこの会場に来た。要するに大都会である大阪の空気と京都の空気が全く違うし、住んでいる人間も違う。なぜかというと、僕は京都に帰ったら歴史のうえを踏んで(生活して)ますから、そういう遺産がいっぱいある。常に未来も必要だが、(京都には)そういう過去に行かざるを得ない雰囲気がある。

だから津波が来て、こうなるといことはどこへ行っても分かる。例えばあの小さな鴨川のところで“殺し合い”があった、というのも全部頭に入ってくる。ところが大阪に来たら、そういうのは全くない。またそういうことを認識する場もない。テレビがきちっと教えるという歴史が今の大都会にはない。かろうじて京都には残っている。京都に住んでいて幸せだなと思っている。いろいろなことが勉強できるし、少なくとも仏教で言えば、2500 年前のところまでが自分の関心領域にある。今の考え方と昔の考え方がどう違うのかということがはっきり頭の中で分かってくる。

司会 (議論が) 白熱しているうちにぼつぼつお開き(約束)の時間になってきた。

成瀬氏 皆様のご意見というのはよく似た年齢で、いつの時代も“若者アカン”という話だが、この下(の年齢)の人たち同士ではどうなのでしょう、やっぱり正論はあるのだろうか。

出席者 正論というものはない。そういう主義主張とか、ポリシーとかいうものはない。民放に入ったら給料もいい、これほど安定産業はない。言い過ぎかもしれないが、そんな気持ちで働いているというのが多いと思う。それもいいんだが、それだけじゃダメで、何のために放送局で働いているか。仕事の内容はどうか、もうちょっと高い意識をもってやってほしいと思う。それで「メディアウオッチング」というグループを作ろうと呼びかけた言いだ

しっぺの一人だが、そういうことを我々だけが言っているのではなく、今の人たちに何とか伝えたい、もっと言うとその周辺にいる代理店とか民放を支えてくれている人たちに理解してもらいたいと思っている。

出席者 (今の人たちは)情報は持っているが、「知(知識)」を持っていない。だから物事を的確に判断できない。

出席者 現状を見る限り、上は政治家の先生方から個人の庶民まで、自分が将来10年先、20年先何になっているか、どうなっているか考えているのか疑問を感じる。

司会 一番責任のある立場にいる人たちがどんな方向に向かおうとしているのかということを知ることが、その会社の方向を知る上で大事なことだと思っている。今の経営者はもちろん危機感を持っているが、その方向性を変えることができるか。締めくくりの話としてお聞きしたい。

出席者 会社で言えば経営者、国では指導者というか、その日本国民全部が総ざんげする必要はない。トップ及びトップに近いところにいる人は考えないといけないことだと思う。同じような意見があるが、それは民放だけではない。ぴしゃりとやらないといけない。方法はないかといえば、方法はあると思う。先ほどイラストで紹介された番組の中に「自遊空間えっくす」(MBS)というのがあった。あの番組は深夜の時間帯で売れる番組ではなかった。売る気のない番組だった。だが、当時はあのような(自由な発想の)番組を作ろうというものがあった。制作者の気概のようなものはあった。そういうことは他の番組にもあった。そういう番組を一つでも二つでも制作し放送しておれば、どこを見ても、同じような番組をやっているという非難は消える。それは出来るんだ。やっぱり責任が重いのは若い人より上層部にいる人たちだ。経営者も年代とともにダメになっている。

「なぜ日本は没落するか」(岩波現代文庫)を著した 森嶋通夫さんは「2050年の日本社会はこのまま突き進むと没落する」と予言している。それはなぜかという戦前の教育を受け継ぎ、戦後教育制度が変わったが、少しずつ残ってきたものが2050年には消えるというのだ。森嶋さんの仮説だから全部それが正しいとは言えないがそういうことはなるほどと思われる。しかも森嶋の論では、その教育はトップの教育である。指導者の教育がダメになってきているというのだ。しかしやりようによっては出来ないことはないと思う。

成瀬氏 下世話だが、各家庭でほとんど男子専用の便所がなくなった。そして男女共用

になってしまったのは、これは違う、おかしいと思う。

ファストフードで食べ物を買って、食べながら歩く、こういった食べ歩きは僕らの時代にはなかった。そんなことしていたら叱られた。今やそれが普通のことになってしまった。スタジオで立って食べている風景をよく見かける。いいか悪いか分からないが、僕らの尺度では考えられない。

出席者 それは日本が戦争に負けたからそんな風になってしまった。(日本は)50 番目のアメリカの属国なんだ。

出席者 それは同感なんだが、いろいろ劣化して日本人がバカになっていく。教育の問題も日本が負けたからそうなった。しかし勝ったほうも同じだと思う。アメリカはものすごく悪くなっている。やっぱり戦争したらいかんということか。

出席者 負けてヨーロッパ型の社会になっておれば日本は変わったか。全部アメリカを見習ったからいかんのだ。基本的には家庭と地域社会の崩壊である。要するに地域の掟がなくなった。

司会 幅広い議論になってどこで区切ったらいいか、分からなくなってきた。とりあえず時間で区切らせていただく。  
成瀬さん今日はほんとうにありがとうございました。

成瀬氏 今日は皆さんのお話を聞かせていただいた。

出席者 成瀬さんからいろいろ貴重な話をしていただき、さらに引き出していただいたので、人類の未来まで話が発展した。実りのある会であった。

以上